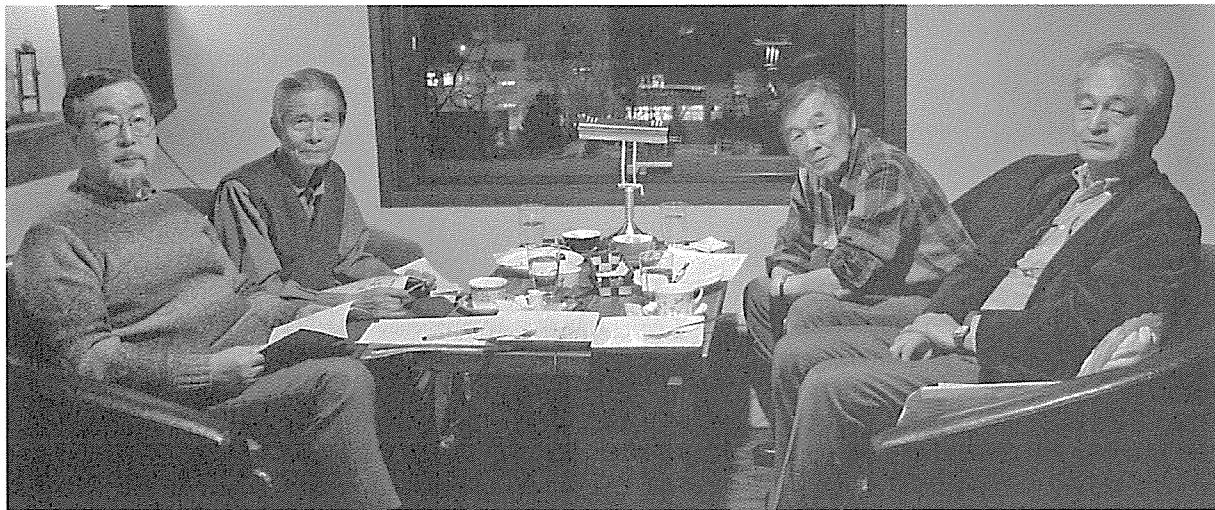


## 北海道自然保護協会創立 50 周年座談会



日時／2013年12月16日 午後3時～5時30分

場所／大倉山月見想珈琲店（札幌市中央区）

出席／鮫島惇一郎（協会元副会長、自然環境研究室主宰）

俵 浩三（協会名誉会員、専修大学北海道短期大学名誉教授）

寺島 一男（協会元理事、大雪と石狩の自然を守る会代表）

佐藤 謙（協会会長、北海学園大学教授：司会）

（事務局：福地郁子・佐々木克之・在田一則）

### 北海道自然保護協会設立 以前の自然保護活動

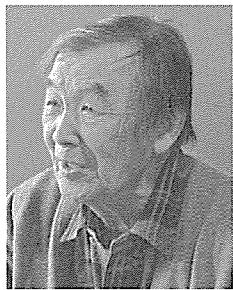
佐藤：温故知新、過去を振り返って未来を展望するという形で、北海道自然保護協会（以下では協会）を含んだ北海道の自然保護活動について話していただきたいと思います。まず序論として、協会ができる前の時代について、俵さんと鮫島さんにお願いします。

俵：協会は1964（昭和39）年に設立されたのですが、その背景として当時大雪山ではロープウェイや道路の建設設計画が進んでおり、北大の井手賛夫先生（協会初代理事長）たちが危機感をいだき、自然破壊を阻止したいという狙いがあったのですね。層雲峠～赤岳～お鉢平～勇駒別を結ぶ大雪山観光道路（道道）が赤岳の途中までできた段階で、これ以上道路が開削されたら「国立公園として自殺行為に等しい」と1967年に町村金五知事に直訴したら、知事はその場で建設中止を即断してくれたのです。そのとき、「なぜ自殺行為なのか」の根拠として大雪山一帯の高山植物の分布状況をまとめた資料があり、それがものをいったのです。

その分布状況を調査したのは北大農学部の館脇操先生で、先生は1959（昭和34）年に日本自然保護協会北海道支部を設立して活躍していました。ここに『大雪火山群の研究』という報告書（日本

自然保護協会調査報告第8号、1963）がありますが、これは日本自然保護協会北海道支部がまとめたもので、当時の北海道支部の先生がた、地形・地質を石川俊夫（協会3代会長）、植物を館脇、動物を犬飼哲夫（協会初代副会長）、昆虫を渡邊千尚（協会初代理事）の北大の諸先生が担当したもので、『大雪火山群の研究』は当時の研究成果がまとめられた優れたものでした。したがって、日本自然保護協会北海道支部の存在が非常に大事だと思うんですね。このまとめがあったからこそ、協会は設立後すぐに運動を展開することができたんですね。

もう一つ、協会活動とは直接関係ないが、1955（昭和30）年に『石狩川源流原生林総合調査報告』という総合的な調査研究がまとめられました。その現地調査は昭和27～29年に行われたが、それに鮫島さんが参加されている。その報告書の印刷時には、1954年の洞爺丸台風によって原生林がなくなってしまっていたんです。そういう意味で、昔の記録が残されたことは非常に良かった。鮫島：『石狩川源流原生林総合調査報告』が実現したのは、大雪営林署と上川営林署の力が非常に大きく、その人たちが総合調査の企画全体の橋渡しをしてくださった。当時はまだ国有林の力が大きくてね、松川恭佐さんという方が森林経営や林業の現状をまとめられた。その一方で、自然の状態



をしっかりと把握して欲しいと言われたのが館脇先生。館脇先生が非常に懇意にしていたのが石川さん、渡邊さん、犬飼さんの先生がた、そういう人たちが応援してくれたんですよ。ですから、地質、植物、昆虫、動物の

研究者がぜんぶそろった。二部構成の報告になっており、たしか、第一部が館脇先生らの自然、第二部が国有林経営だった。当時は、台風が来る前に調査が終わってほんとうによかったという話があちこちから出てましたね。

そもそも、館脇先生と大雪山の結びつきが親密になった一つのきっかけは、旭川であった北海道開発大博覧会でした。それが1950（昭和25）年、その時に館脇先生たちが中心となって高山植物館を造ったわけですよ。そのときに出来上がったのが『大雪山の植物』（1949年、林友会旭川支部）だったと思います。

俵：あれの姉妹編のような『十勝岳山彙の植物』（1950年、旭川営林局）や『十勝川音更川上流の植生』（1950年、帶広営林局）などもありましたね。鮫島：あの頃は、大雪山の植物が非常におもしろかった。

俵：私も若いころ、それらを読んで勉強したんですよ。

鮫島：その後に、「自然に親しむ運動」、道有林のね。道有林の広報誌『林』が発行された。層雲峠で、レンジャーという制度ができましたと、初めて紹介いただいたのが俵さん。昭和30年代ですね。

俵：私にとっては原点みたいな話、大雪山に入り始めたのはそれがきっかけだったんですよ。その時代からなので、私は大雪山の原生林を知らない。風倒の跡地しか知らない。

佐藤：洞爺丸台風の風倒木処理が終わったのは何年ころですか。

俵：処理は昭和29年から昭和34年の5年間くらいかかった。

鮫島：上川の町にとって、風倒木処理はありがたかった。町が潤ったのですよ。

俵：今の三国峠越えとか、石北峠越えの国道は、風倒木処理のための林道が原型になってできたのですよ。そういう意味では、大雪山の自然保護に大きな関わりがあるのですね。いまはマイカーで林道を使って沢の奥まで入って山に登るでしょ。だから、風倒木処理は大雪山の自然保護には大きな意味があったのですよ。

鮫島：風倒木処理がなかったら、大雪山は違っていたんだろうね。

俵：それまでの北海道の造材は馬籠による冬山造材だった。それが風倒木処理のために林道によるトラック搬出になった。その後、林道の重要性がますます大きくなり、その流れから拡大造林政策が生まれてくるのですよ。積極的に原生林を伐採して人工林に変えていこうという拡大造林政策は、この風倒木処理の経緯があったから生まれてきたのですよ。

鮫島：風倒木処理では業者が足りなかった。だから、猫も杓子も木材業者になったんですよ。処理が終わった後に、かなりの数の業者が廃業してしまった。

俵：拡大造林政策の背景にはね、そういう業者を生かさなきゃダメだということもあったわけ。その中から森林開発公団も出てくるのですよ。それが大規模林道に結びつくことになった。

佐藤：先ほど、館脇先生が「札幌自然同好会」を作られ、これからは市民の意識を高めなくちゃというので、見学会とか絵はがきや植生図の作製とかを行ったという日本自然保護協会北海道支部の前の自然保護活動のお話がありました。北海道支部の前のお話について、なにか継ぎたすことはありませんか。

寺島：館脇先生は北海道支部を作る前に、すでに何か考えがあって活動しておられたのですか。

鮫島：北海道支部の前身というか、萌芽を作ったのは館脇先生だと、私は思っています。先生が第二次世界大戦後、食うものが何もない状況のなかで、確か『花』という本（1948年、創元社）の巻頭言に、「今はすぐにダンゴ、という時代だけれども、ダンゴの元になるのは花である。だから私は『花』という本を書きました」と書いてあるんですよ。戦後まもない1946年には、北方出版社から『<sup>アラシ</sup>草百種』も出されていますね。

俵：私も覚えているのは、その前書きに「草百種」というと優雅な感じがするけども、現状はそんなものでない。明日を生きるために何を食べるか、そのためにはこの野草の案内を書いた」といった内容が書かれています。

鮫島：ザラ紙でね、今ひらくと破れてしまいそうな本です。

佐藤：私が生まれた頃の話になっていますが、時間の流れに沿って話をまとめますと、1948（昭和23）年くらいから「札幌自然同好会」の活動が始まって、1959（昭和34）年に日本自然保護協会北海道支部を設立され、その北海道支部が1964（昭和39）年に北海道自然保護協会に発展した。

鮫島：1950（昭和25）年の同好会時代は組織として固まってなにかを行う方針があるわけではなく、ただ好きな人が集まって花をみて歩こうといった同好会ですね。

佐藤：館脇先生によるマリモ調査もその頃ですね。

俵：マリモの調査は昭和25年ですよ。阿寒湖に水力発電計画があってね、水位が下がり、マリモが打ち上げられてしまった。それが天然記念物になっていくきっかけです。

俵：その前に赤岳の道路の問題もありましたね。

協会が設立されてからは、一番最初は、恵庭岳スキー場の問題、そして大雪山の観光道路です。

佐藤：赤岳の問題、いまから50年前ですね。館脇先生たちがよく調査研究されていたことが、運動に反映されたということですね。

鮫島：館脇先生は若いときから太っておられたので、情熱はお持ちでも日高の山で沢や尾根を歩くのはむずかしく、札内岳に関する調査研究でも現地調査は坂本直行さんが行っています。先生はとにかく大雪が中心で、十勝から始まって音更山、三国山、ニセイカウシュッペの辺りが先生のフィールドになっていた。それで、国有林との接触も非常に多かった。

## 北海道自然保護協会の設立のころ

佐藤：それでは、お話を北海道自然保護協会設立のあたりに移しましょう。

俵：1964（昭和39）年に北海道自然保護協会ができたとき、日本全体の状況はどうだったかというと、東京オリンピックの年で、高度経済成長がどんどん進み、1956（昭和31）年には「日本はもはや戦後ではない」という経済白書が出ていた。昭和30年から高度経済成長が始まり、その中で所得倍増計画が出てきたりして、経済がどんどん高度成長したが、公害も生まれてきていたわけですよ。そういう状況で出た自然保護に関係ある本として、一つは昭和39年に発行された深田久弥さんの『日本百名山』がある。この年には、昭和37年

に原著が発行されたレイ・チャエル・カーソンの『沈黙の春』の日本語訳（最初の書名は『生と死の妙薬』）も発行されている。この2つは、いまだに文庫になって読み継がれています。今の若い世代まで、脈々と受け



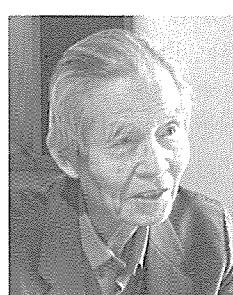
継がれているわけですね。しかし、1972（昭和47）年にでた田中角栄の『日本列島改造論』は文庫化もされず、古本屋でも見かけませんね。

『沈黙の春』について申しますと、アメリカで初版が出る前に雑誌に連載されていたそうです。それを読んだケネディ大統領が、DDTについて書かれていることが真実なのに興味をもち、農薬委員会を作つて調査を命じたそうです。そうすると、自然学者であるカーソンはデータを間違なく使っているという結果が出て、ケネディはすぐにDDTの使用を禁止したわけです。このように踏みきったところでケネディは暗殺された。実際のDDT使用禁止は暗殺の2年ほど後だと思うが、先に政策の転換が行われていた。ケネディが死んだ後は副大統領だったジョンソンが大統領になったんですが、1968年の大統領選挙で共和党のニクソンに代わってしまいます。しかし、アメリカ社会ではこの『沈黙の春』によってどんどん環境問題が顕在化し、そして、いわゆるエコロジーブームがその頃起り始めたんですね。そのようにエコロジーブーム、環境問題を呼び起こしたことでもすごく大事な本なんですよ。大統領になったニクソンは、アメリカ社会は環境問題に非常に敏感なので環境問題に取り組まないと中間選挙に負けちゃうよ、ということになって、民主党が主張していた環境問題をぜんぶ自分の政策に取り込んじゃったんですよ。ニクソンは、1970年代に環境問題を重視した方針を出し、国家環境政策法（NEPA）を作り、環境保護庁を作り、環境問題を非常に重視した政策をとります。日本では、それがそっくり輸入されて、1971年に環境庁ができたのです。

佐藤：日本の環境庁ができたのは私が大学4年生のときでしたね。エコロジーブームが60年代からアメリカで盛んになって、日本は10年遅れて自然や環境が重視されるようになった。

俵：環境庁ができる前に「アースデイ」というのがあったんですよ。日本では公害が盛んでね、経済学者の都留重人が「経済成長は幸福の尺度ではない」と言ったのが、あの頃ですよ。

寺島：そういうえばアースデイっていうのよくやり



ましたね。

俵：日本ではアースディが各地であった。四大公害裁判はまだ判決は出ていませんが、企業の旗色が悪くなってきた頃です。アメリカも1960年代に高度成長をして、日本も60年代に戦後復興して、70年代に転機を迎える、そういう大きな時代の流れのなかで、協会ができたということですね。

佐藤：環境庁ができる前に協会はできたのですね。環境庁は71年、協会の設立が64年ですから、ずいぶん古いですね。

## 大雪山縦貫道路問題と 協会の組織改革

佐藤：それでは、協会ができて、恵庭岳と大雪の道路問題のあたりに話を進めましょうか。そこは会誌33号にかなり書かれていますが……

鮫島：大雪は士幌の前ですね。

佐藤：そうです。寺島さんを最初に見かけたのは大雪山縦貫道路問題のときでしたね。

寺島：その頃はもう、市民運動が具体化していました。

鮫島：赤岳観光道路がつぶれたので、その後に大雪縦貫道路が出てきたんだよね。

佐藤：その辺を寺島さんにまとめてもらいましょうか。

寺島：その前に、大雪山縦貫道路に関して、鮫島先生たちが「大雪の自然を守る会・札幌」の札幌会を作った経緯を話してもらったほうがよいのではないかですか。

鮫島：当時の国立農業試験場に、西村格さんという方がいましてね、ある日、西村さんが私のところに来て、「大雪があぶない、なんとかしなければ」と言うわけですよ。その頃の北海道自然保護協会はサロン的な雰囲気でね、東條さんが会長、事務局長が井手さん、他に今井道雄さんなど経済界の偉い人ばかり並んでいてね。それで、北大の小関先生と西村格さんとオレの3人でなんとかしなくちゃならない、と話し合った。世の多くの人は、協会について「サロン的な雰囲気の、ただ話し合いをするだけの会」という評価だったのね。そこで、「いまの協会のままではだめだ、大雪の縦貫道路に対して、あれはどうだ、これはどうだ」という話になり、坂本直行さんや伊藤秀五郎さんなど、そこらの有識者が集まって、協会の組織を何とか改革しなくてはいけないねーという話になった。ああでもないこうでもないと言っているうちに、「あとはあなたたち若い人に任せるから」と言って、会長の東條さんが辞めてしまった。それじゃ

あというわけで、北海道自然保護協会の体制を変更していくことになった。その時、理事の選考の仕方もずいぶんと揉めたんだよね。はじめは50人くらいの理事がいた。

俵：去年の『北海道の自然 総目次』の解説に、私がその辺のことをかなり具体的に書きました。

鮫島：理事を20人にしようということになった。私の記憶では、選挙で決めるのが10名、出来上がった理事で決めるのが10名とした。後の10名については、特定の活動範囲に偏らずに北海道全体の自然を知るために学者先生を入れましようと、地質は誰それ、植物は誰それ、というように、分野をいくつか決め、それからPRとか社会環境とか旅行とかの分野も考えて集めた。あわせて20名で出発しようと決まった。それで現在の基礎ができた。

俵：そうなんです。

鮫島：大雪山縦貫道路問題の頃、協会会長をどうするべというとき、坂本直行さんらと話して、一番に名前が出てきたのは伊藤秀五郎さんだった。これから自然保護では、環境教育も重要視されてくる課題だろうから、伊藤さんを会長にするべという話になった。伊藤さんが会長をやって(1973~1974年)、その後が石川俊夫先生だった(1975~1979年)。専門の理事といわゆる一般の理事と10名、10名で出発しましょうという頃に、あの大雪の課題が出てきて、ゴジャゴジャやっているうちに、札幌でそんな会（大雪の自然を守る会）ができたんだから、旭川でも「大雪の自然を守る会」をつくらなければと、水野好吉さんが会長でできて、それができてから新得にできたんだよね。

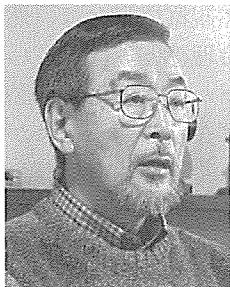
寺島：いや、新得がすこし先でしたね。札幌の会が準備会から正式の会になった時に、僕らの旭川の会ができましたね。

佐藤：すこし整理しますと、協会会長が伊藤秀五郎さんと石川俊夫さんですね。それで、その「大雪の自然を守る会」と「北海道自然保護協会」は別のものですね。

寺島：当時、協会は大雪縦貫道路問題では、会長、副会長が経済界の大物であったこともあって反対表明がストレートに出せなかったわけですよ。それで、やきもきした市民の連中がもう少しきっちりとした形を出したいと、札幌に「大雪の自然を守る会」を作ったと聞いています。それが旭川や新得などの会と連携をはかる中で、協会自体も変えるべきだとなり、組織改変が行われたわけです。

鮫島：北海道自然保護協会の現在の姿の中に、「大雪の自然を守る会」が非常に重要な働きをしたことは確かだと思う。きっかけを作ったというかね。

## 大雪山縦貫道路の現地調査 一市民による現地調査の重要性



寺島：そうそう、いや、もつと言ふとですね、我々できたての市民運動と協会は格が違つたからね、やはり影響力を与える点では協会が動かないとだめだと思った。でも、いくら待つてもなかなか動いてくれないから、やっぱり我々のほうで動こうかと。それから、この運動で重要な出来事がもう一つあった。市民を動かすにはやっぱり現地を見るところから運動を組み立てなおさんとダメだというんで、その現地調査を実施するんですよね。今更あそこを見てもたいして見るものはないし、沢山の人が入るわけだから、逆にいうと、自然破壊になる。だからまあ、そういう現地調査はやめたほうがいいというような話もあって、相当ケンケンガクガクの議論があったんですよ。結局、十勝側と新得側から現地調査に3泊4日で入るんですよね。登山道もなにもない藪道ですから、なかには登山の心得もありない人たちもいて、本当に今考えたらよくやったなあと思うんですけどね。メンバーが50名の中にマスコミの連中が11名、二桁入ったんですよね。その影響が大きかった。

佐藤：それは、何年ですか。

寺島：1973年。その時ほとんどの研究者の人たちはビビってその運動に参加しなかったんですね。そのなかで、率先して入ってくれたのが鮫島先生でした。そして、実際に現地に入ってその路線予定ルートを見ると、地図には現れないいろんな問題が沢山見えてきて、それを参加した人たちが現地で議論することになるんですよ。それを参加したマスコミの連中が取り上げ、何と全国発信したのですよね。その影響が非常に大きく、縦貫道路を止める一つの要因になったと思いますね。

鮫島：その現地調査っていうのにね、我々は初めて参加したけどね、その時は、現地調査を素人がやってどれだけの効果があるのかということは、やっぱり疑問だったのね。そしたら、現地調査というのを1回やってみて、あれは現地調査の非常にユニークな、そのはしりだったとわしは思っているわけ。それから後、いわゆる現地調査というもののスタイルがだんだんと整ってきて、それで参加する人たちの意識も変わってくるのですよね。実際に参加したということで自信を持ったっていうか、一つのパターンができてくる。だから、

そういうことからすると、現地調査ってのは有効な方策だなっていうふうに考えていますけど。

寺島：何かのデータを取るといった調査ではなかったんですが、それをやることによって、運動自体が動いていったっていう感があるね。このスタイルっていうのは、そのあの北海道の自然保護運動にも大きな影響を及ぼしていくわけですよ。だから、その後に出てきた日高横断道路も、大規模林道も、土幌高原道路もね、大雪縦貫道路のときの現地踏査が一つのまあ、土台になっています。

鮫島：その中で、マスコミの人たちにどうやったら理解してもらえるのか、そういうのがかなり真剣に討議されたね。

寺島：そうですね

鮫島：味方になってもらうということが、どんなに有効な手段であるかっていう、一つのなんていふか、運動の方法っていうパターンが出来上がったんじゃないでしょうか。

寺島：それと面白かったのは、言ってみれば、素人と専門家がいっしょになって歩くわけですよね。素人にしてみれば全然よくわからんこともあって、でも、彼らは率直にストレートに聴いたりします。それに対して専門家の人たちが、懇切丁寧に教えると、それをマスコミの人が聞いていて報道するというように、そういう面白い繋がりがある中でできたんではないかと、思ってるんです。

僕：そう思いますね。それでほら、朝日なんか本多勝一さんがいたでしょ。あの人が書いてくれるのはでかく書いてくれたんですね。あの日高横断道路もそうですけどもね、大雪縦貫道路もね、知床森林伐採もね、朝日が結構大きくキャンペーンをしてくれたのはね、非常に大きかったと思いますよ。あの人の筆の力というかね、やっぱりペンっていうのはすごいと思ったね。

佐藤：そう、僕も思いました。

僕：協会としては大雪縦貫道路に反対できなかつたんですが、当時の実際の理事で、協会ではなく学識経験者の名前で、こういう陳情書を出しているんですよ。これに鮫島さんも入ってるでしょ。この名前を見てください。この人たちは、多くが理事で、大学の先生だった。

佐藤：その方々は、後でぜんぶ理事になっていますね。

僕：要するに、当時の会長が、協会としては大雪縦貫道路に反対できませんから、意見書は出せませんから、と言ったんで、しょうがないから、じゃオレたちがやろうって言ってこの陳情書を出したんですよ。わたしはその陳情書をいただいたほう

で、当時はまだ道庁職員だったので。

鮫島：なるほど

佐藤：当時の北大の先生はまともですね。これを見ると。

## 自然保護運動の進め方について —自然観察から自然保護運動へ

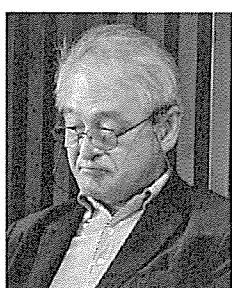
佐藤：会員を増やす、世間の関心があまり高まっていない、最近マスコミがあまり取り上げてくれないといった問題点を周知させなければならない課題があります。さきほど鮫島さんからいかにしてマスコミを味方に取り込むかを真剣に討議したとの話があり、寺島さんからは、現地調査でいろいろ教えあうなかにマスコミもいて、勉強しあっていたという話がありました。今の協会では、ここら辺が一番不足だと思っています。鮫島さんが副会長の頃、自然保護読本などわかりやすい解説書をたくさん発行し、自然や保護の問題を周知させるところにすごく力を注いでいた。現在の自然保護協会の会員はみな頑張っており、講演会もよく開催してはいるのだが、そこの一般への周知について、ご意見をお聞きしたいと思います。

俵：その辺は協会の弱みなんですけどもね、結局、自然観察協議会が協会とは別組織になっているでしょ。あれが協会の中でいっしょに二人三脚でやっていればだいぶ違っていたと思うんですけどもね。当時担当の福地さんがいますが。

福地：何年か前まで、自然観察指導員講習会は指導員登録をする日本自然保護協会と北海道自然保護協会、北海道自然観察協議会が共催でやっていたが、講習会受講後この3つの団体の会員を継続するには1万円以上の会費が必要となり、登録に関係のない当会の方は短期間で会員をやめていくのが現状でした。

俵：以前のように、日本自然保護協会や北海道自然観察協議会と共に活動できると、協会としていいし、そういう意味で、寺島さんところ、旭川はうまくやっているんですね。

佐藤：最初の頃は、自然観察指導員の講習会は日



本自然保護協会と協会が共催しており、どちらの会にも入ってもらう形で進めてきた。しかし、自然観察協議会が完全に独立した形になって、協会は無関係な形になっている。他方、協会では、僕

が理事になりたての22年前くらいに観察会も大事だとして開催されてきた。そういう観察会は、今、俵先生が言ったように、他団体といっしょに実行しないとダメですね。自然観察協議会は自然観察が中心になっている。協会理事と重なっている人が何人もいるが、自然観察から自然保護運動への参加に転換してもらわねばならない。それが寺島さんのところですごくうまく有機的に結びついている。

寺島：必要に迫られてそういうスタイルをとらざるを得なかったということなんだけども、結局、僕らは、頭の部分よりは体の部分でとにかく運動をやろうというところがあったから、そうなると、そこに参加をしてくれる市民がいないとダメですよね。だから、いくら理屈を並べても、それはまあ「理解しましたよ」という話にはなるけれども、それ以上の行動がでてこないんですね。だから、もっと違う、自然の楽しみ方や面白さや肌身で感じるような何かを持たないと、運動は進まないのではないかということです。たとえば、「大雪山講座ひぐま大学」とか、子供たちが対象の「グリーンフォーラム旭川」という組織が、まあ自然保護だけを一直線に見るとね、ちょっと遠回りかなと思うような活動が僕らのまわりにいっぱいあるんですよ。それは、ものすごいエネルギーを食って、ちょっと遠回りをするように見えるんだけども、長いある一定の期間を過ぎてみるとね、それはものすごい近道になっているんです。現在、僕らの会には運営委員が30人くらいいるんですが、僕を除いたその人たちのほとんどがひぐま大学やグリーンフォーラムに参加した卒業生なんですね。目的一直線だけの運動ではやっぱり人の繋がりを作れないと思うんですよね。

それともう一つ、運動の論理として、たとえば、開発する側と保護する側があって、一つのシーソーに乗っているとしますよね。こちら側に開発があり、あちら側に保護がある。ところが、それはシーソーだから、保護のほうが重みを増せば、バランスがとれるかというとそんなことはありえないのです。たとえば、僕らが取り組んできた北海道の問題というのは、国の開発が圧倒的に多いんですね。すると、相手は比較できないほどの大きな権力も財力も情報もすべて持っているから、これは市民がどうもがいたってそのシーソーは水平になることはありえないんです。そのバランスを変えるには、シーソーにしたらダメで、テコに変える必要がある。テコにすれば、権力・財力・情報という重さがなくても、テコの長さを長くするだけで相手を持ち上げられる。このテコの長さ

を変えることが市民運動であり、それは人の繋がりだと思っているのですよね。

佐藤：そのところで、協会がもう一つ組織的に倍になれるならば最高だと思う。一方で、いろいろな開発計画や環境アセスメント書が立て続けに出てきて、道の基本方針とか國の方針、法令などと開発の内容を読んで、そのつど、頭の部分でも開発の論理矛盾を突いておかないと、協会は何も言わないという話になる。開発計画に対する意見は、それはそれでものすごく必要だと思う。だけど、それはギリギリでやっている状況がある、ほんとうに。最低限なのだが。

寺島：僕らもそれはね、両面作戦がやっぱり必要だと思います。つまり問題のある開発と対峙するということは、その計画書にしても環境アセスメントにしてもその中身を具体的に把握しないと、それはできないですね。だから、専門的な能力を持って、それを分析する力は必要です。でも、それは一つの会だけで処理する必要はないんですね。個人や団体が繋がることによって解決できる。北海道自然保護連合という組織は実はそういう必要性の中で生まれてきた連合体です。さまざまな持ち味を持った人や団体が結びつくことによって、運動はうまく進展すると思うんです。

鮫島：あのね、なんていうかしら、いわゆる自然というもののPRね、それをうまくやっているのは二つあります。一つはね、大雪の寺島さんのとこのグループ、もう一つはね、あの「森林は友達」といったかな？

俵：林野庁のOBでしょ。

鮫島：あの人のやり方と寺島さんのところのやり方ってのはね、非常に共通した部分があるのね。だから、組織といふものも非常に大きく発展しているわけ、両方ともね。ところが、それ以外のグループっていうのはね、「大雪山ですよ、はい、あなたたちこれを理解しなさい」というやり方だもんだから、ちっとも膨らんでいかないんだよね。それじゃなくて、なんというか、これはね、こうしなくちゃならないんですよっていう部分をね、除いてしまうと、意外と入ってついて来るんじゃないかなっていう気がするのね。

俵：なんという人だっけ、「森林は友達」。自然観察をやっている営林署のOB。

鮫島：そうそう、今、NPO法人森林遊びサポートセンターの、小林文男さん。<sup>もり</sup>あのグループのところなんかは、実際に森林なら、森林の扱い方っていうものにどんどん参加させているでしょう。参加している人たちはものすごく喜んでやっているのね。

福地：年間100日近く外に出て作業をしている。自分でお金も出してでも、行くんですよね。それで森林作業をする。植林なんかの作業をしたことがない人たちが来て喜んでやってるようです。

鮫島：錢<sup>マネー</sup>出してまでね、参加したいっていう組織っていうのはすごい。

福地：だから、あまり難しい理屈はないっていうでしょう。

鮫島：自然というものを理解してもらう、あるいは我々が生きるために自然が必要だよっていうことを、一所懸命口で言ったってダメなんだよ。

俵：たぶん、まだそういう組織になる前に、福地さんとあそこに行ったでしょう。定山渓の奥の。

福地：漁入ハイデ（豊平川上流の漁入沢にある風穴地（局所的な低湿地）の地名、ハイデはドイツ語でツツジ科低木が優勢な荒れ地の意、渡邊定元命名）。

俵：あれ、小林さんといっしょだったよね。実はね、わたし士幌高原道路を、だいたいのルートは知っていましたけど、初めて歩いたとき、あっ、これは漁入ハイデと同じだと思った。それで、佐藤さんに調査してもらったんですよ。それから、あそこの風穴植生ってのが解明されてきたの。

俵：たまたま小林さんという人が営林署OBだったものですから、今日はいいところに連れて行ってあげるよと言われ、何人かといっしょに私も連れて行ってもらったんですよ。それを見た直後に士幌に行ったの。

佐藤：私はたまたま、学生時代の1969年か70年に、渡邊定元さんが定山渓営林署の署長さんだった頃、定元さんといっしょに歩いたことがあった。不思議なところだったので1980年代に植生調査をして生態学会誌に発表したのが1993年だった。ちょうどその時に、俵先生に士幌に行こうと言われ、アセス書を読むと、なんか、漁入ハイデと同じ現象が環境アセス書に見えてきたので、最初から温度計をもっていった。温度計で測ったら、9月下旬で地温が零度に近かった。これは同じ風穴だということになった。

俵：そういうことでね、わたしはその自然観察に連れて行ってもらったので士幌の問題点がわかつて、ただ、わたしは素人でよくわからないから佐藤さんに頼むと言ってやつもらつたんですよ。

佐藤：本当に、観察会とかそういったものはすごく重要だ。観察会では、100を見せた中にこちらが言いたい自然保護論を1ぐらいだけ、ちょっと混ぜておくと、みな納得してくれるのだろうなという気持ちはある。それがすごくあって、寺島さんのところの活動をうらやましいなと思いながら、

一方で、僕先生の後釜としては、やはり自然破壊者の矛盾を叩かなくてはいけない、理屈で。これは佐々木さんが頑張っているダムでもそうなのでですが。両輪ですね。そうなると、今、皆さんのお話を聞いて思うのは、一つは、自然観察協議会と連繋することが重要であり、もう一つは、北海道自然保護連合との連繋が必要なこと。道内の自然保護関係者がもう一度集まってそれぞれ協力しあう体制を作らねばならない。協会の役割は、やはり、理屈で叩く部分があると思う。だから、一方で、そこは外すわけにはいかないなという気持ちがあり、一方で、鮫島さんの言うように、いくら口で言ったってダメという気持ちもある。仲間を増やすために。

僕：福地さんね。協会がずっとやってきた「美林ツアーア」なんていうのはね、わたしは、アレはあれで一定の効果があったと思うんですよ。

福地：ありました。私たちの年代の人たちにもう一度ああいうのをやってほしいとの声もあるけども、今は朝日カルチャーや道新が同じようなことをやっていますよね。バスに講師が同行し、解説を受け、同じ山を見るにしても知的に見たいという中高年が増えている。観察会でもやはり単に楽しむだけのものではなく、手間暇を惜しまず、理論をちゃんと伝えるように、協会は役目を持ったほうが良いと思います。

寺島：僕らの世代は情報がなくて、知に飢えるようなところがあったんだけど、今は逆に、知の飽食時代とでもいうか、そういう行為に飽きだしているんだよね。だから反対にね、僕らには想像もしなかったようなとんでもない体験がね、もう面白くてしようがない。たとえば、森林調査に行って木の抜根なんかを、ササヤブ漕いでいって巻尺で測ってもらうと、それが面白くてしようがないと言うのね。あのヤブの中でダニに食われてね。そんなことやって何が面白いのかなと思うんだけど、そういう体験が何かの関心を引くんですね。

鮫島：だから、その小林文男さんのやり方っていうのは、教えるんじゃないんだよね。まず、楽しませるわけ。その楽しませるという中からね、教えなくちゃならないものが、自分の中に芽生えてくるというようなやり方、これがなんかね、原動力かなあって感じがするのね。だから、どっちかというとさ、こういうことがあるんだから、これをあなたに教えましょうっていうのは絶対ダメなんだよね。

寺島：僕らもね、いま思うと、そうやって押し付けてばかりいた。そういうのはダメってことだ。

鮫島：そのあたりが指導員グループっていうか、

そのやり方。教えるっていう立場なんだよね、その中身がさ。だから、あんなにつまらないものはないんだよ。お前たち知らないから教えてやるんだぞっていうね、まあ、悪く言えばね。どうも人様っていうのはね、教えられるっていうことはあまり好まんものだね、まあ我々自身もね。

僕：そう、だから何か意外なもの。その人にとって意外だと思うものを見せてね、驚かせるということが大事なんだよね。

## 現在のエネルギー問題と 自然保護

佐藤：今、協会で大きな問題としているのが風力問題です。最初は、石狩の砂浜・砂丘を破壊する風車問題に取り組んでほしいという要望が会員から出てきました。石狩海岸は北海道自然環境保全指針によって長さ 25 km に及ぶ砂浜・砂丘が「優れた自然地域」とされているが、その砂浜・砂丘を破壊して風車が建設される計画があります。知事と札幌開発建設部、そして道の環境生活部も「北海道自然環境保全指針には法的拘束力はない」から建設できるという立場をとっています。指針は反故になるのと問うと、理念としては続いていると言い張っている。そういう貴重な自然な海岸砂丘を壊す風車建設計画に反対しています。石狩の砂浜・砂丘を破壊する風車建設計画に対しては、日本生態学会自然保護専門委員会の委員であった時に、自然保護専門委員会から中止要望の意見書は出してもらった。

現在、石狩海岸では石狩湾新港も含めて 4 社で 80 基くらいの風車が林立する計画になっています。全国における風車の定格出力がちょっと前までは 800 kW とかせいぜい 1,500 kW や 2,000 kW だったが、今回の計画は最大 3,500 kW くらいまでの大型風車で、大規模な高層ビルが何列にもなって建つ感じです。大きな影響の一つが健康被害。健康被害は自然保護協会が扱うところではないかもしれないが、健康被害と自然破壊が連動しているので、勉強しながら取り組んでいます。

僕：なに被害？

佐藤：健康被害、低周波などによる。私は、機会あるごと、愛知県の田原、豊橋とか、静岡の東伊豆、南伊豆とか、見ることができるところができるだけ見てきたが、相当深刻な健康被害が地域として確率論的に高く生じている、ある一定の距離範囲で。三重県伊賀市でも見てきました。それらをあわせて、風力発電問題を考えています。

今は、原発がダメだから再生可能な自然エネル

ギーがいいという、そういう短絡思考があります。その短絡思考による自然破壊や健康被害についてどうしたらいいかという問題がある。寺島さんがすでに地熱に関して対応しており、今度の会誌にも書いてもらっています。十勝川源流のトムラウシ温泉付近の地熱計画については、十勝の川辺さんから資料がきています。その概略を読んでみると、国立公園の第2種・第3種特別地域では環境庁が地熱開発OKと言っているが、その計画地が「十勝川源流原生自然環境保全地域」に直接隣接している。これもまた、協会だけではなく、みなで協同・連合して対応しなければならないテーマだと思います。「CO<sub>2</sub>を出さない原発がいい」、「原発ダメだから今度はCO<sub>2</sub>を出さない風力がいい」とか、そういう短絡思考がある中で、今後エネルギー問題を扱わなければならない。どういうふうに皆さんができるか、お聞きしておきたい。

俵：東日本大震災以降はですね、津波に対する防波堤や防潮堤の問題もあるんですよ。太平洋沿岸にさ、東北地方から北海道にかけてものすごい防波堤を造ることになっている。それは国土強靭化法にのって出ているわけです。風力発電などの自然エネルギー開発問題もそうだ。両方とも景観の問題、環境の問題からいって非常に難しいから、困っちゃうなと思っているんですけどね。

佐藤：今の防波堤に関しては、日本生態学会自然保護専門委員会がつい最近、異常だという一つの意見を出しています。

俵：そういう意見をどんどん出して、さっきの話じゃないけど新聞などでもね、キャンペーンを張つてもらうことを考えなければならない。

佐藤：新聞などでは、風車のデメリットはなかなか報道されない。風車のメリットオンリー。再生可能な自然エネルギーはいい、原発はダメという、短絡的な論理で進んでいる。そこを説得しなければならない。

寺島：それはもう、昔の開発か保護かの焼き直しみたいなもんですね。

佐藤：そうです。寺島さんのところ、上川の地熱では、どういうふうなことを考えられているのですか。

寺島：あのね、その前に一つは、いま僕は、我々は自然保護といって一つの仕分けをもっているけれどね、そういう仕分けはこれからはもうできないのではないかと思うのですよね。トータルといつたら変だけど、問題の一面だけでなく、さまざまな面の問題を総合的に扱わざるを得ない部分がね、あるのではないかということですよ。白水沢の地熱開発を見ていると、先に開発ありきで、

その問題がよく理解されていない。それで、問題と反対を真っ先に出してしまうと、それだけで地元の人がどんな反応を示すか想像ができます。賛成か反対かはまず置いておいて、メリットなりデメリットなりをまずトコトン話し合ってみることが大事じゃないかと思うんです。だから、賛成か反対かで地元の人たちを白黒に分けるようなやり方はやめたほうがいいのではないかと思うんです。でも、まあ裏には大きな構造があるから、僕らのような思惑とはまた違うところに進む部分もあるんだけど。

佐藤：地熱は、これからがあるからまだいいんだけど、風車は現在進行形、アセス書でも手続きがだいぶ終わったとか、そういった段階にある。たとえば、札幌市では、工学系の人たちだけで検討会を作り、石狩海岸の砂丘を破壊する風車群について低周波音による影響・健康被害はないという結論を公表した。私たちとの交渉で、札幌市が全国の事例を調べた結果、それは引っ込めさせた。小樽市は、私たちとの話合いの結果、昨年東伊豆町とか健康被害が生じた地域を視察している。交渉では、まさにメリット、デメリットの両方を知りなさいと述べてきた。建設前から健康被害というデメリットを知っていれば、「未必の故意」になる。でも、全国的な傾向として、今まで健健康被害が生じても、風車による影響がないはずだから知らないという話になっている。だから、健康被害を今知ってもらおうとしているが、石狩市は動こうとしない。道府も自然環境保全指針についてだいぶ指針に反すると抗議したので、石狩砂丘の風車建設に対する道の意見の内容は、少しは良くなった。私たちは反対を鮮明にしているが、基本線はメリットとデメリットを論議しなさいという点です。

太陽光はアセス手続きがないから、今年、一気に増えている。しかし、太陽光もよく聞くと、電磁波などの影響というデメリットもあるらしい。人によって電磁波の影響を受けて具合が悪くなる。いいこと尽くめのことなんてないですね。今まで、これらの開発が進んでいなかった理由があつたのですね。原発がダメだから、自然再生エネルギーで行け行けドンドンっていう感じですね。

俵：あと、風車の場合は、やはりバードストライクの問題があるからね。鳥の専門家にすこし……

佐藤：鳥の専門家として、理事に白木さんがいんだけど、面倒なのは、一方で「いくら風車にぶつかって鳥は絶滅しない」と言う偉い御用学者がいる。風車についてのいろいろな動きや全体の

流れを見ていると、建設後に、実際に衝突する鳥が多かったなら風車を止めなさいというように、稼働後の事後対策だけになっている。しかし、実際には鳥が理由で止まった例がない。風車の建設地はだいたい渡りのコースです。風が強いところで鳥も飛翔する、そしてバードストライクがある。バードストライクに対する全面的な対策をどうすべきか、なかなか難しい。士幌だったら日本最大級の風穴地帯とか、石狩の砂浜・砂丘だったら日本最大級の自然な海岸砂丘生態系と言える。ところが、それ以外の牧草地に立てる風車建設設計画に対しても今まで協会は意見書を出してきたが、バードストライクだけで戦うとき、それ以上もって行きようがない難しさを感じる。ただ、ドイツとかの例を見ると、さっき言われたデメリットとメリットを対比して論議している。その結果、ゾーニングができている。彼らは、いろいろな意見や市民の意見を入れる。それに対して、日本の場合はそうではなく、風の状況が良いから建てましょうとか、良質な熱源があるから地熱発電を建てましょうと、まさに論議不十分で、開発が先行する。僕：将来のことを言うと、サハリンのオイル、あれを今度ひっぱってくるでしょう。パイプラインがどこを通るのかということが問題になってくると思いますよ。

佐藤：5、6年前、サハリンの最高峰を目指して、サハリン中部付近まで行ったときに、パイプラインのための森林伐採のところに何回も入った。パイプラインのために伐採している森林の幅が相当に広い。何百メーターも。おそらく森林火災との関係によるのだろうが。

僕：それも現実になってくるでしょうから、今の問題、これから的问题は難しくなりますね、非常に。

佐藤：エネルギーだから。

## 国立公園の線引き(ゾーニング)の見直し

僕：風力はだいたい海岸線沿いででしょう。それに対して、石狩川源流や十勝川源流の第1種、第2種の話、あれは、大雪山だけではなく国立公園全体についての問題となるんですね。さきに話がでた風倒木処理の後に、拡大造林政策が始まった。だいたいその頃に、国立公園特別地域の第1種、第2種、第3種を決めているのです。1960年前後。その頃、拡大造林政策の対象地になっているところは第3種特別地域か普通地域、それから対象になっていないところでは第1種か第2種の特別地

域、と決めるという話になっていた。要するに、森林施業の仕組みにあわせて、国立公園が妥協せざるを得なくなっていた。知床もそうだったので、要するに、森林施業の仕組みがどうなっているか、それにあわせて森林施業ができるように、ここは第3種にしましょうという決め方をしているので、自然環境保全のための第3種特別地域じゃないんですよ。それが1960年代から今までちっとも変わらないで、今に生きているんですよ。寺島：そういう点で言えば、第3種だからいいとか、普通地域だから開発がいいということではないんですよね。

僕：そうなんです。

寺島：もっとやっぱり違う価値観で決めなおさないとダメだっていうこと。地熱の開発はいま、国立公園がほとんど対象地ですからね。最後は、国立公園とどんな接点を持つのかというふうにならざるを得ないと思うのですよね。その時に、その国立公園というのがそれだけ説得力を持つような中身を僕らが出せるかということが問われるのではないかと思うんですよね。だから、その中には今、僕さんが言っているようなゾーニングも含めてね、国立公園のこれまでのあり方や現状の実態を踏まえた上で見直しておくことが必要ですね。

僕：そういう点でうまくいったのは、知床なんですよ。あれはほとんど100%が特別保護地区相當になっちゃったわけですよ。ただ、国立公園区域については、区域の取り方がいいかどうかというのは問題だけど。それが大雪とか阿寒とか支笏湖になるとね、1960年前後の森林施業の仕組みがそのまま今も生きているからね、「ここは第3種だから開発しますよ」ということになって、地熱発電でも、第2種や第3種だから何も関係ない、何も規制がないから開発をやっていいんだっていうふうに使われてしまうわけです。わたしは、国立公園についてII型（自然性の高い原生的自然などの保護地域）とかV型（景観中心の保護地域）とかよく言うんですけども、日本の国立公園や国有林は、IUCN（国際自然保護連合）でいうII型のタイプに持っていくことを進めないと、国立公園は守れないなと思っているんです。V型は現在の日本の国立公園の状況、要するに、妥協しましょうというほうなんですよ。

鮫島：それでいい例がさ、日高の国定公園だよね。線引き（ゾーニング）なんてのは、ほんと、いま僕さんが言ったとおりだからね。

僕：そうなんです。

鮫島：「ここんところね、材積がなんぼあるから、ここは外してくれ」でしょ。それでもって、あの

出来あがった線引きというのはさ、まことに複雑な線引きであってね。

俵：あの日高横断道路のね、あの日高側の最終地点は千石トンネルというんですね。

佐藤：あそこの流域だけ国定公園の範囲からはずれて、へこんでいますね。

俵：千石トンネルって何かっていうと、まわりの森林が千石山だったよということなの。1町歩当たり千石の材積がある。すごいものなんですよ。千石は今の立方メートルに直すと、1ヘクタール当たり300立方メートル以上なんですよ。

佐藤：森林生態系保護地域の線引きもそうですね。森林がない高山や湿原、林業対象にならない高い所のダケカンバ林が森林生態系保護地域になっている場合もあり、変なところがあります。国立公園では、保護の観点から本質的な線引き（ゾーニング）が必要なんですね、基本は。

俵：そうです。

鮫島：だって、林業サイドから国立公園の線引きを勝手にやってさあ、自分たちに都合のいいようにやっておいて、開発となると、ここは何々のふうに指定されているから開発できるとかさあ。

---

## 自然保護に関する 地域型の問題

---

寺島：まあ、これからはきっと地球環境問題とかね、大きな枠組みの問題を相手にしなければならなくなる。それともう一つ、これまで、あまりなかったけれど、地域型の問題というか、それも増えてくるのではないかと思うんですよ。

佐々木：地域型とは、どんなことですか。

寺島：身の回りのその地域だけに留まるような問題。たとえば、旭川でいま問題になっている常磐公園の樹林伐採とかね。今回の旭川なんかを見ててもそうなんですけども、問題が顕在化した段階ではもう、はっきり言つたら遅いのですよね。原案がでた段階でも遅いくらいで、やっぱり素案の段階くらいで市民の意見を聞いたり、市民がそこに参加できるような枠組みをね、作らせていくことが大事だと思う。そして、それは逆に言うと、地域の問題だからできるし、それができれば枠組みを超えた問題の取り組みにも生きてくると思う。それは、対象が一つの地域だから、そういうことができるのではないかと思う。

福地：じゃあ、協会でいえば、藻岩山ですね。展望台の施設の建て替えの時にはもう、後で聞いたら計画がだいぶ進んでいた。俵先生がだいぶ頑張ってくださったが、結局建て替えられ、今、利

用する人が少ないのでロープウェイ往復1,700円もかかるのを1,000円に割り引いている。結局使われないものを造って、後から安くしても採算がとれない。私たちももっと早く対応すべきだったといろいろ反省するところがあったが、俵先生が一所懸命、意見をまとめてくださったけど、ちょっと遅かったのですよね。

在田：計画アセスか、事業アセスかっていうことですね。今行われているのは事業アセスですね。計画段階で検討しないと意味がないと思います。

寺島：ええ、もっと言えば、アセスをするもう一つ前の立案の段階に意見を反映させられるようにしないと、ダメではないかということですね。

佐々木：立案については、情報網が大事ですが、一番いいのはそういう制度ができるんですね。

福地：今一番悪いのはパブコメで、意見を募集しているというふうに言ってみせるけど、読めないような膨大な資料に対して、一般市民の人がどうやって意見を出せるのでしょうか。

寺島：パブリックコメントはぜんぜんダメですよ。パブリックコメントそのものは、一体何のためにやるかというと、企画立案をする際に参考にできるアイディアや意見があるかどうかをちょっと聞く程度のもので、意見が多いから少ないからそれをどうこうするというものではないんですね。パブコメは必要だけども、もっと違う仕組みを持たないことにはダメですね。

佐藤：旭川のいろんな計画の段階に関する委員に、「大雪と石狩の自然を守る会」から何人も入っているのですか。

寺島：いや、何人も入れない。まあ、せいぜい一人か。一人や二人入ったってね、簡単にはひっくり返せないです。

佐藤：8対2くらいの割合になっちゃう？

寺島：うん、いやそれもきっと人数の問題じゃなくて、今言ったように、その段階なのだと思うんですね。

佐藤：ということは、それを早く察知する方法というか。

寺島：ええ、その仕組み、なんて言うか、市民参加条例とか、街づくり推進条例とか、そういう何か条例を作らせてね、その中でやるという形になると、彼ら（行政側）も動かざるを得ないよね。

佐藤：仕組みとしてね。昨日も石狩で、東伊豆町の健康被害と自然破壊を含んだ風力に関して東伊豆の町会議員の藤井さんという方に講演をしていただいて、一昨日は、北海道経済学会で私が風力の話をしました。その時の司会者の演者3人への質問が「先生がた、経済成長をどう思うんですか」

であった。質問の主旨は、自然保護と経済をどう調整するということでした。私は、環境をちゃんと配慮しないと経済成長はありえないと答えた。「妥協できないのか」という質問、あの石狩の海岸で「砂浜に何基までだったら妥協できる」とかの考えがないのかという質問があつて、あの海岸の自然是貴重だからダメ、一級品の自然ですという話をしました。とにかく、メリットとデメリットをしっかり話さないといけないが、一方で、過疎の町での地域づくりとか、そういう別の命題がすごく関わってくる。関わってくるが、よく考えると、こちらの考えは、作らないほうがその地域にとって良いだろうというのが基本なのですね。経済的なことは、すごく困る質問になるけれど、田舎育ちの私には何もしないほうが田舎のために良いと思うことが多い。地域の自然がかえって荒らされ、お金は他から来て持つて帰っていくだけの話という、そういう感覚がある。

佐々木：経済問題はやっぱり経済の人によつてもらわ必要がある。地方にダムを作るが、ほとんどのお金は東京に行く、だからその地域はあまり潤わない。

佐藤：風力も、ほとんど北海道のためではない。それで、北海道の事業者が儲かるのではなく、私たちの税金を本州のために使って、本州の事業者がお金を持っていく。その結果、荒れた自然と健康被害しか残らない。

佐々木：そういう経済モデルになつてゐるが、それは変えられないといつた。もう一つは、さつきの国立公園と地熱の話に関わるが、私が問題視するダムにも関わるのだが、ドイツのメルケル首相が脱原発を決めたのは、専門家の意見を聞いて決めたのではなく、倫理委員会を作つて、各界から委員を選出して決めた。我々の子孫にこんなものを残すのは倫理的にダメだ、との結論によつて脱原発を決断した。だから、国立公園というのも、ほんとうに我々で残す残さないということは、なにか説得力のある言葉で、後は、何か哲学的になるのか知らないけれども、大きな視点が必要な気がする。

佐藤：寺島さんの自然保護と開発を分けられない

という指摘と同様に、自然破壊と放射能汚染も単純に分けられないところが多い。実は、今度の会誌は原子力の影響、放射線の影響が特集です。

俵：そうですか。

佐藤：それは、編集委員長の在田さんが企画し、私が「巻頭言」を書くことになったが、このテーマは、私にとって一番悩ましいところです。今の寺島さんの発言と関わるところ、環境問題一括みたいなところは書かねばならないし、しかし一方で、自然保護も重要だよという内容も書かねばならない。二重構造になる。

寺島：まあ、できることとできないことが出てきますよね。

佐藤：そう、そのところなんです。今度の会誌の特集号は、放射線の自然に対する影響を考えさせる。

佐藤：最後に、今日の感想を言うと、とにかく全体的に、初期の協会が始まる前からの全体的な社会背景を把握した上で、協会が生まれたころをしゃべっていただいた。それから協会がサロン的だったところから変わって行った経緯もお話ししていただいた。さらに、協会だけではできないことを全道的に連携してやってきた、そういう活動がなお不足だったかもしれないけれど、それが話された。残るまとめとしては、大きく環境倫理、哲学をきちんとまとめなさいということをおっしゃっていました。あとは、今後のエネルギー問題など難しいところがあるけれども、自然保護が中心だが、もっと視野を大きく持つた取り組みをしていかなければならぬという話をいただいた。だいたいそんなところでしょうか。

佐々木：市民に親しまれるようにとか、いろいろおっしゃっていましたね。

佐藤：残る重要なことは、そうです。協会が一番困っていること、行政や事業者と戦うことだけに片寄り、市民を巻き込めていないという反省があった。その点についても、いろいろなアドバイスをいただいた。逆に言うと、いろんな団体との連合が必要だということになるのだと思います。